

はねバド！ —羽咲綾乃
は天才である—

サイレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——天才は……作れる。

羽咲有千夏は、娘の育て方を間違えた。

目次

第1話	出逢い	1
第2話	たのしいバドミントン	15
第3話	約束	30
第4話	再会	46
第5話	北小町高校バドミントン部	66
第6話	神童	85

第1話 出逢い

「……なんですか？」

「え？」

空気が一変したのが分かった。

普段の剽軽とも言える態度からは考えられない志波姫唯華しわひめゆいかの鋭利な声音に、コニー・クリステンセンは目に見えて動揺する。

「ど、どうしたの唯華？ そんな急に怖い顔して？」

コニーが慌てるのも無理はない。

つい今しがた家族と優しく迎えてくれた唯華が、突如として見たことない険しい様相に急変したのだ。

会話の内容におかしなところは無かった。少なくともコニーはそう思っている。会ったことのない姉に、血の繋がりの無い家族に逢いに来た。

コニーの来日目的を風の噂で聞き及んでいたのだろう唯華が、訊ねてきたから答えただけ。

——お姉ちゃんの名前はなんて言うの？

「コニー、今アヤノって言った？」

「う、うん。ママから聞いた名前だよ？」

「……あなたのママ、まさか羽咲有千夏うちかじゃないでしょうね？」

「ママを知ってるの？？」

純粹に驚いた。

日本人バドミントン選手としての有千夏の実績をコニーは知らない。

知っているのは母としての姿と、圧倒的なバドミントンの力量。

わざわざ他国に赴いて自分のような選手を育成するくらいだから、日本でも有名なのかも。コニーは漠然と考えていた、それだけだ。

(まさか本当にそうだったなんて！ やっぱりママはスゴイ！)

改めて母と慕う有千夏への尊敬の念を強くするコニー。

対照的に、唯華の表情は剣呑なまま口許にだけ喜色が混ざっていた。

「まさかこんなタイミングで手掛かりが転がり込んでくるなんてね……」

何気なく気になって、バドミントン選手ならもしかしたら知っているかもと訊ねてみたが、予想外の朗報に唯華は即座に携帯を取り出す。

登録されている友人の電話番号を押し、空けている耳許へ。

何度かのコール音の後、相手は出てくれた。

『もしもし?』

「ああ、泪なみだ? 遅くにごめんね」

『別にいいけど。それで、なんかあった?』

「うん、実はね……」

——羽咲有千夏の手掛かりが見つかった。

電話越しにも、相手の空気がしんと張り詰めるのが分かった。

『詳しく聞かせろ』



「……やつと着いたー……」

げんなりと疲労気味の黒髪をリボンで結った少女——羽咲綾乃は、肩に掛けていた大きなラケットバックを下ろしてぐーっと伸びをした。

遙々やってきたのは宮城県。神奈川在住の綾乃からしたら十分な遠出だ。

ついこの間まで中学生で、先日高校の入学式を終えたばかりの綾乃である。当然一人

でこんなところまで来れるわけがない。

「おい綾乃、勝手に離れるな」

「あつ。電話終わったの、泪ちゃん？」

無造作に散らした淡い金髪の少女——益子^{ましこ}泪が綾乃に声を掛ける。

携帯をポケットに入れながら綾乃に近付く泪は溜め息を隠さない。

「お前は基本ポンコツなんだから無闇に動き回るな」

「あー！ 泪ちゃん酷いよ！ 私だつて宮城ぐらい一人で来れるんだから！」

「そういう台詞は一人で新幹線の切符を買い取るようになってから言え」

ぐうの音も出ない綾乃はうーうー唸つて泪に掴みかかろうとし、そんな彼女の頭を押

さえつけながら泪はニヤリと笑う。

仲良し姉妹のようなその光景を眺めていたもう一人——旭海莉^{あさひかいり}は、滅多に浮かべな

い柔らかな微笑を打ち消して二人へと歩を進める。

「泪、それで志波姫は何て？」

「迎え寄越すつて。それまでは待機」

「そう思えば路^{みち}ちゃんは？」

「アイツは一足先に着いてるつてさ」

「おお！ このメンバーで集まるのも久しぶりだね！」

「私たちは月一以上で会ってる気がするけど……」

海莉の二人に向けた呆れたような内容の発言は、当の二人には流された。手持ち無沙汰となった三人は雑談に興じる。

「綾乃、高校はどう？」

「うん、エレナとクラス同じだったよー！」

「そうか、それは良かったな」

「エレナってあの娘か。さしずめ、高校での泪代わりの保護者だな」

「旭、私はこんなやつの保護者になった覚えはない」

「そうだよ海莉ちゃん！ ブラコンの泪ちゃんが保護者なんておかしいよー！」

「言ったなお前……」

眉間に皺が寄り、泪の形相が般若のそれへと変貌。整った顔立ちが大いに歪んだため迫力が常人の比ではない。

泪はそのまま綾乃の顔を鷲掴みにし、万力の如き握力でアイアンクローを炸裂させる。

いゝゝゝゝだゝゝゝいゝゝゝ……っ!? と必死に拘束を解こうと力む綾乃の努力は芳しくなく、頭割れるんじゃないかという痛みが少女を襲った。

泪にブラコンは禁句なのだ。

残念ながら隙あらば揶揄うのが友人たちであつたが。

現に海莉も唯華と合流したらおちよくなる気満々である。

「外れないくくくくくつ!!?」

「外して欲しかつたらなんか言うことあるだろ?」

「助けて海莉ちゃん!」

「悪い、無理だ」

「ごめんなさい泪ちゃん!!?」

「二度と言うなよ?」

「約束はしない!」

「良い度胸だ」

「あゝあああああああああつ!!?」



忙しい足音が体育館に木霊する。

落ち着きなく歩き回り、頻りに扉を開け外を確認しては落ち込み、緊張がぶり返したのか再度歩き始めるコニーを、唯華はいい加減面倒そうに眺めていた。

「コニー、もう少し落ち着いたら？ 駅には着いたって連絡はあったんだから、そのうち来るよ」

「それは分かっているけど……大体！ どうして私が迎えに行っちゃいけないの!!？」

早くアヤノに会いたかったのに、唯華が止めるから！」

運動着に着替え、ストレッチも入念に行い、後は待ち人が現れるのを待機するのみだったが、そもそもここにきて更に待つことにコニーは不満たらたらだった。

時間が異様に長く感じる。日本に降り立ってからと考えればほぼ最速での邂逅ではあるのだが、直前でお預けをくらった気分なのだ。

お膳立てしてくれたことには感謝しているが、コニーが唯華に鬱憤を打つけるのも分らないもなかった。

しかし腹に据えかねていたのは唯華も同じ。

コニーに出逢った時に見せた、怒気を孕ませた凄絶な笑顔で口元を歪ませる。

「あら、言ったわよね私？ 綾乃には怖いお姉ちゃんが二人もついているから、いきなりコニーが絡んだらロクなことにならないって。本当は私が迎えに行くつもりだったのに、あなたが駄々捏ねるからわざわざお客様である路に行ってもらったのよ？ ホストの

私の立場を何だと思ってるのかな？」

「……ゴメンナサイ」

あ、やばい怒らせてる、とやつと気付いたコニーは恐怖からか逆らうことなく謝る。

一月にも満たない短い関係だが、唯華は典型的な怒らせてはいけない人間だと把握済みだ。これ以上下手に藪を突いても良いことなど何も無い。

大人しく待つしか選択肢が無くなったコニーはやる事もないので最後の確認と身体を解し、最終的にまた歩いて時を潰す作業へと逆戻り。唯華はもう知らんと溜め息を零した。

「フレ女とーちやーくっ！」

「相変わらず遠いな」

「まあみんな別々の県だし仕方なくない？ 次集まる時は石川来てくれるんでしょ？」

「未だになんで私は三強の友人関係に混ぜられるのかが分からない……」

しばらく経って。

あまりの待機時間に不貞腐れ始めていたコニーの耳に、外から近付いて来る聞き慣れない他人の喧騒が届いた。

眼を輝かせたコニーはギョルんつという音を立てて方向転換。

ドドドド！ と猛ダツシユで扉に向かうコニーへ唯華は全力タツクルをかまし、聞き

分けのない子供を力付くで黙らせ行動不能とする。

それでも諦め悪くコニーは唯華の腕の中で腕き続け、唯華は主将兼保護者としての責任から妥協なくコニーを縛り付けるといふしよもない攻防戦が勃発。

結局、その不毛な争いは扉が開かれるまで継続した。

「離して~~~~~っ!!?」

「コニー！ 私の言うこと何一つ覚えてないの!?!」

「……ねえ、泪ちゃん」

「……なんだ?」

「あの外国人さん誰?」

「これが出逢い。」

羽咲綾乃とコニー・クリステンセンの、感動もへつたくれもない出逢いだった。

「ええー、ご紹介します。この春からウチに所属することになったコニー・クリステンセンさんです」

乱れた髪を抑えながら唯華はチームメイトを紹介する。

先程までの暴れ振りからは想像できない借りてきた猫みたいに大人しくなったコニーは、もはや徒労にしかならないだろうけど態度を取り繕って髪をかきあげ胸を張っ

た。

「コニー・クリステンセンよ。デンマークでプロをやってたわ」

「あつ、泪ちやんラケット変えたの？」

「ああ、前のはもうボロかつたし」

「くくつ……！ 何それ。ちゃんとお兄ちゃんにプレゼントしてもらったって言わないの？」

「旭！ それは言うなよ！」

「へえ、本当に仲良いんだ。ぷぷつ、泪顔紅くなつてんじやん！」

「あらまー、泪ちやん可愛いなー。そんな一面があつたなんて唯華お姉ちゃんも知らなかったわー」

「——私の話を聞けええええええツ!!?」

唯華含めて全員に一顧だにされなかったコニーは思わず叫ぶ。こんな経験は生まれて初めてだと全身で訴えるような気迫だった。

荒い息を吐くコニー。

これで少しは興味を持ってくれるだろう。

『やーん、ブラコン泪ちやんかーわいー!!?』

「お前ら全員ブチ殺す」

目の前で殺伐とした追いかけてこを始めた連中は、きつと良心という人には欠かせない心を持っていないのだ。唯華の対等な友人なのだからそのくらい予想して然るべきだった。

コニーの身体が細かに震え始める。

羞恥もあつたがそれを軽く上回る感情にコニーは身を任せ、日本に来てから色々と思ひ通りにならない鬱屈の蓄積を爆発させた。

「待ちなさい！ ツー！ アヤノオオオオオオオオオツ！！？」

一人に狙いを定めたコニーが爆走。

次々と下手人共が泪に捕まる中、最後まで逃げ続けていた綾乃は追っ手がコニーに変わっていることに仰天する。

あの外国人さんはなんで私を追い掛けてると冷静な疑問を浮かべ、泪から離れつつ会話が可能な距離を保つために速度を落とした。

「ねえ、あなただーれ？」

「さつき自己紹介したんだけど!!?? コニー・クリステンセン！」

「へえ、じゃあコニーちゃんだね。コニーちゃんなんで私追い掛けてるの？」

「みんなが私を無視するからでしょ！ 私はアヤノに会いたくて日本に来たのに！」

「……………ん？ 綾乃って私のこと？」

「そうだよ！ ママから——有千夏から聞いたんだもん、日本にはお姉ちゃんがいるって!!？」

瞬間、綾乃は脚を止めた。

唐突の静止につんのめりそうになったコニーはギリギリで堪え、至近距離で綾乃と対峙する。

コニーは改めて、まじまじと眼前に立つ綾乃を見詰めた。

(アヤノ、私のお姉ちゃん……)

身長はコニーよりも低い。長身の有千夏と比較すると一層低く感じるが、小柄という程では無く日本の女子の平均といったところだろうか。因みに胸も有千夏よりは大幅に慎ましやかだ。

しかしそれ以外は瓜二つと違っていい。髪の長さが異なるだけで、顔付きや髪型から間違いなく親子だと判断出来る。

綾乃の小さな口が微かに開いた。

「ねえ、コニーちゃん。今、何て言ったの？」

こてんと首を傾げる綾乃はふつと眼を細めた。

やっと自分に関心を抱いてくれたとコニーは嬉々とし、前かがみになって綾乃に話し掛ける。

「うん、あのね、私デンマークでママに、有千夏にバドミントン教えてもらってね、それで、ママには日本に娘がいるって聞いて、私どうしても会いたくって、だからアヤノに、お姉ちゃんに会いに日本に来たんだよ！」

「……ふーん」

溢れた返答は淡白に尽きる。相手突き放すような淡々とした響きだ。

翠緑の双眸には親近とは無縁の冷徹が宿り、母の名前に対して綾乃が反応を示すことは一切無かった。

感情が昂ぶっていたコニーは綾乃の異変に気付かない。

思いの丈を伝えるがために言葉を繋げる。

「あのね、お姉ちゃん！ 私ね」

「コニーちゃん、バドミントン出来るんだよね？」

「え？ うん、出来るけど……」

「じゃあ試合やろうよ」

「……うん！」

ニコリと微笑む綾乃。

念願の望みが思わぬ形で思いの外早く叶うことにコニーも勝気な笑みを浮かべる。

コートに入り互いに向き合う二人。

その様子を外から見ていた残りのメンバーは、静かに見守ることに決めたようだ。

全員に拳骨を振り下ろした泪は腕を組んだまま、好奇と懸念が入り混じった瞳でコニーを見据える。

「唯華、アレは本当に大丈夫なのか？ 綾乃と試合して」

「……正直分らない」

自信無さげに、けど……と唯華は続ける。

「あの娘は綾乃と戦わないと先に進めないから。それに日本でバドミントンするなら時間の問題でしょ。……これで壊れるなら、コニーがその程度だったってことだよ。……

ああ、頭痛い」

「自業自得だ」

険しい瞳で泪たちが見守る中、綾乃とコニーの試合は始まった。

第2話 たのしいバドミントン

——羽咲綾乃は天才である。

そう周囲に認知されたのは彼女が中学三年生の時。全日本ジュニアの準決勝、益子泪との試合がきっかけだ。

元々実力者として有名だった泪と当時世間的には無名に近かった綾乃が繰り広げた激戦は大会史に残り、綾乃は神童として名を馳せた。

記者は当然綾乃を追い掛け始めた。

未来の日本代表選手になり得るかもしれないとバドミントン業界は湧いたが、綾乃の密着取材が表に出ることは一度も無かった。

綾乃が拒否したわけではない。

取材内容が薄かったわけでもない。

ただ異常だったのだ。

綾乃の練習風景が、プライベートが、バドミントンに対する価値観が。

特に異様だったのは、中学以降の綾乃と過去に対戦したことがある現役選手が数える

程も存在しなかったこと。

記者が何人か捕まえて話を持ち掛けたが、揃って全員が口をつぐんだ。思い出したくもないと恐怖していた。

辞めた選手に至っては二度とバドミントンをしないと断言される始末。取材を始めてしばらくして。

羽咲綾乃は禁忌として業界に認識された。



「11ー7！ インターバル」

主審を務める海莉の声を聞き、ふうーっと長い息を吐き出すコニー。

試合形式は練習ということでワンゲームマッチだ。

リードして折り返せたが、内心そこまでの余裕はなかった。

(思ってた以上にやる、流石はママの娘……)

「は、コニー」

「ありがとう」

唯華から手渡されたタオルを受け取り、コニーは流れ落ちる汗を軽く拭う。

失われた水分を補給しながらコニーは綾乃を盗み見る。

汗一つかいたようには見えない綾乃は、唯華と同じく補佐に就いた泪からスポドリを受け取っていた。

(でも、なんか不気味。本気を出してるのかな?)

違うのなら屈辱だ。

プロとしても活躍する自分が手加減されているなど断固として認められない。

煩悶とした表情で綾乃に熱視線を送るコニーの眼差しが鋭利になり、複雑に入り組んだ心情が一目で判るその様子を見ていた唯華は一つ助言をする。

「コニー、やるなら難しいこと考えないで淡々とやるといいよ」

「悪いけどそれは出来ないかな。せつかくアヤノと試合してるんだもん。それに、この程度ならどうやっても私が勝つからね」

「……あつそう。言ったからね私は」

踵を返す唯華がいつもより冷たく感じるが、そんな瑣末事は今はどうでもいいとコニーは捨て置き、待ち望んでいた一戦に意識を戻して集中を深くする。

体力に問題はない。振り返れば走らされていると判ったが、この程度の疲労は過去に

何度も経験している。

綾乃のスタイルは拾うバドミントンだろう。生半可な決め球では綾乃の防御を突破することは能わず、一点ごとに長いラリーが続く為に体力勝負に持ち込まれる。

ならばそのリズムを崩せばいい。

やりようは幾らでもある。手数で翻弄し、力で押し切り、綾乃の呼吸はずらして主導権を握ることが出来れば試合は勝つたも同然。

戦略の精査を終えたコニーはコートに入る。

ラケットを左右に振り準備を終えたコニーはネット越しにいた綾乃を見て、まず感じたのは漠然とした違和感だった。

「綾乃、ラケット変えたの?」

「そうだよ」

淡々とした返答に、しかしコニーはそうじゃないと思い直す。

変わったのはラケット。

そして、それを握る手だ。

「……どういうつもり?」

「ん? 何のこと?」

「さっきまでは右手持ちだったでしょ? まさか利き腕じゃなくても私に勝てる?」

ああ、と得心がいったのだろう。

ふっ、と綾乃の口許に淡い笑みが浮かんだ。

「私左利きだよ、コニーちゃん？」

「……………は？」

心底、ぽかんとした。

呆然と浅葱の瞳を大きく見開いた後、その意味を呑み込んだのか顔を赤くして怒りを露わにする。

グリップをあらん限りの力で握り締め、険悪な感情を隠さない双眸でコニーは綾乃を睨み付けた。

「冗談でも笑えないよ、アヤノ」

「冗談じゃないよ？ おかしいと思わなかったの？ お母さんだって左利きなのにな？」

「そ、それは……………」

言われてそうだと合点してしまう。

なぜ試合開始時点で強く疑問に思わなかったのか。…………いや、疑問自体は覚えていた。ただ、試合が進む中で「これだけのプレーが出来るのだから利き手なのだ」と勘違いしたのだ。

大体、利き手と逆の手で試合に臨む者など普通はいない。

「じゃあどうして最初は右手を使ってたのよ!?？」

「ん? いつも最初は右手を使うからだよ?」

「は? ……じゃあいつも途中から左手を使うの?」

「んーん。あまり使わないかな。でもコニーちゃんはちゃんと強いからこっちが使えるって思ったんだ!」

「……つまり今までは本気じゃなかったってこと?」

「え? ちゃんと本気だったよ?」

「なんだこれは……と、あまりの不気味さに怒気が霧散したコニーは顔を引き攣らせる。

常識やら人間性やら価値観が全く異なる人物と話していると、こんな薄気味悪い感覚を味わうのだろうか。コニーの投げた問いに対してまるで見当違いの回答が返ってくるものだから、会話が殆ど成立していない。

沈黙の帳が降りる。

コニーの瞳に悍ましさに似た感情が宿るのを、ギャラリーの面々は明瞭と感じ取った。

「いやー、綾乃のあーゆーヤバイとこ見ると、よく仲良くなれたなーってひしひしと思うわ」

「路……」

遠慮が一切ない発言。泪は機嫌悪げに横目で発言者を窺う。

腰まで伸ばした黒髪を靡かせる快活げな少女——津幡路は、そんな泪のお冠加減を感じ取ったのか大袈裟に肩をすくめた。

「怒らないでよ泪。唯華だって少なからず思ってるよきつと」

「ちよつと、勝手に私を巻き込まないで」

「そうやっていつも唯華は良い子振る」

再開されたラリーの応酬を背景に、現女子高生バドミントン選手の中で最強を誇る「三強」と呼ばれる彼女たちは綾乃を見遣った。

「あーあ、左手使っちゃって。ホントにあの留学生大丈夫なの？」

「私が知るか」

「私も知らない」

「無責任過ぎでしょ……」

まあいいけど……と路はカラツと笑う。

「ホント相手をナメ腐ってるよね綾乃は。プレースタイル自体は唯華と似てるけど」

「それは心外だわ。私と綾乃じゃ似ても似つかないわよ。ねえ泪？」

「根本的に違うからな、あいつは色々」と

一口にバドミントンと雖も、スタイルは十人十色。

強打で点を取りにいく攻撃的なバドミントン、ひたすらに拾って相手のミスを誘う守備的なバドミントン。ネット前の乱戦が得意な者や、豪快なスマッシュを武器とする者。挙げれば枚挙に暇がない。

路が言った唯華のプレースタイルに関してだが、徹底した勝つ為のバドミントンだ。洗練された基礎技術、相手の弱点を見切る洞察力、バドミントンIQの高さ。それらの要素を活かして負けない試合運びを完成させる、これが唯華の王道。

対して綾乃はと言うと……

「綾乃はアレだ、自分が愉しむ為だけのバドミントンだな」

コニーのスマッシュが炸裂。豪速のシャトルがコートに突き刺さる前に綾乃が打ち上げる。

「もうっ!!?」

苛立ちを声に態勢を整え再度打ち込む。落ちない。

ドライブの連撃。崩れない。

距離を取ってコート全体を使う。全てが拾われる。

荒々しい息を吐き、全身から汗を吹き出させて髪を振り乱すコニーは焦燥に駆られて

いた。

(どうなってるのっ？！)

インターバルを挟んで、得点が一つも進まない。

コニーの打つクリアもカットもドライブもスマッシュも、悉くがコートに着弾する前に綾乃のラケットに掬い上げられる。

綾乃の脅威的な粘りであればコニーも焦らずに攻め立て続けられるのだが、眼前に見える表情に逐一余裕が削り取られていく。

笑っているのだ。

此方の攻撃を毛ほども意に介さず、綾乃は声無く笑っている。

何も言えぬ恐怖にコニーの身が竦んだ。

「ッ！！？」

恐れを振り払うように力任せな一打を打ちかますが、崩れたフォームから放たれたシャトルはネットに捕まりゆつくりとコートへと落ちた。

「はあ……はあ……っ」

呼吸を慣らせ消費した体力を取り戻すことに努めるコニー。

ラケットを肩に担ぎ首をこきつと鳴らす綾乃。

両者の差は顕著で、それがそのまま得点へと繋がる。

「14 — 1—」

一点も取れぬままコニーのリードは食い潰され、綾乃は着々と点数を積み重ねていく。

いつしか少女の顔から笑みは消えていた。

「どうしたのーコニーちゃん。もっと愉しいバドミントンをやろうよー」

「はあ、はあ……ちなみに、アヤノの言う楽しいバドミントンってどんななの？」

ばちばちと、綾乃は眼を瞬かせる。

コニーとしては少しでも状況を遅らせ挽回の一手を考じる時間稼ぎの質問だったのだが、問われた綾乃は殊の外キョトンとしてしまった。

「どんなの？ どんなの……うーん、口で言うの結構難しいな……」

慮外の質問だった。何度も口癖のように言っていた台詞故か、自身の中で明確な定義付けをしたことはなかったと今気付く。

「私の『愉しいバドミントン』の言語化か……初めてかも……」

抽象的な表現を具体的に改め他人に説明する。この行為がこうまで困難なものだと綾乃は知らなかった。

むむむーと顎に手を寄せ真剣に悩み始めた綾乃をコニーは半ば呆れ顔で眺めつつ、体力を回復させ逆転の思索を高速で走らせる。

懊悩しているこの時間がコニーの思惑通りとは露知らず、綾乃は勝手気ままに沈思する。

(嬉しいバドミントン……愉しかったバドミントンを考えればいいのか？)

地頭は悪くない綾乃はすぐに糸口を掴む。

そこからは芋づる式に根拠を洗い出し、なぜそれが自分にとって愉しかったのかを整理。

最終的に他人にも分かるような説明を考え終えた綾乃は口を開いた。

「分かったよコニーちゃん！」

「へえ、じゃあ教えてよ」

「うん！ 私はね、作りモノの人形だったんだ」

「……………は？ え、人形？」

「そつ、お母さんが作った人形。それが私」

突拍子も無い奇天烈な発言に場が凍る。

泪と海莉は瞳を伏せ、唯華は顔に手を当て吐息を漏らし、路はあちやーと肩をすくめ、

コニーは呆然と固まる。

壊れた空気を気にも留めず、綾乃は喋り続けた。

「バドミントンも最初は楽しかったんだと思うんだけど、他人と試合すればするほど楽

しくなくなつて。でもお母さんと打つのは面白かつたから続けてただけど、一年半くらい前からお母さんもいなくなつちやつたからつまなくなつただよね」

「……………」

「でも私バドミントン以外何もないから大会には出てたんだ。だけどどんなに私が真剣にやつても相手は途中で辞めちゃうし面白くない。ただ、相手の得意なことだとちよつと愉しかったから、途中からは飽きるまで遊ぶようになったんだ」

「ア、アヤノ…………？」

「でもね、去年の秋に泪ちゃんとか試合した時は本当に愉しかったの！ 私が全力を出しても凄い強さで返してくるし、ラリーも全然終わらない。喉が痛くて息が苦しくて全身が疲れ切つてたけど、私その時思ったんだ。あ、今すごく愉しいって！」

はきはきと話す綾乃はいつしか笑みを浮かべていて、コニーにはそれが恐ろしい。

「人形だった私でもそんな人並みの感情が抱けるんだって感動した！ なんていうんだろう、こう、生きてるって感じかな？」

だからね、と綾乃は締めに入る。

「私にとつての愉しいバドミントンは、生を実感できるような心身削り切るバドミントンだよ！」

皮肉なほど綺麗な笑み。

まるきり悪戯を大成功させた子供の表情があつて。
濃密で墮ちそうな深い闇が眼前に。

「あ……………え……………いや……………つ」

言葉が紡げない。脚が後ずさる。口が渴く。頭がくらくらする。戦慄に総毛立ち、少女が侵食する闇に飲み込まれそうになる。

目の前が、真つ暗に、なつて……

「——コニー、しつかりしなさい！」

はつ、とコニーは俯いていた顔を振り上げた。

こちらを睨む唯華の眼差し。視線に乗る優しさに満ちた叱咤激励がコニーに突き刺さり、弱気に支配された心に確かな意気地が蘇る。

「すう……………はあ……………」

コニーはしつかりと息を吸い、大きく大きく吐き出した。

心の中で唯華に感謝を捧げ、コニーは毅然たる態度を纏う。

暗雲に閉ざされた空色の瞳に暖かな光が射し込まれた。

「……………Det^狂er van^てvit^るtigt……………」

……………だとしても、それがなんだ。

何の為に自分は母国を離れ、遠いこの地までやって来たのだ。

左手を上げ、腰を反り、余分な力みを抜き取って、右腕に全ての力を込める。

ここで綾乃に失望されるなどバドミントン選手として、有千夏の娘として死んだも同然。

出てこい、限界を超えた力よ。

綾乃を完膚なきまでに叩き潰す力よ——!!??

「撃ち抜けええええええええええ!!??」

決死の形相でコニーは振り抜く。

風切り音だけを残し、ラケットが霞んで消えるその光景を、綾乃は目を見開いてただただ凝視していた。

第3話 約束

ポテンシャルで云えば、綾乃は決して高いわけではない。

小柄の体躯に凝縮されたしなやかな筋肉と獣の如き敏捷性こそその身に宿しているが、左利きのアスリートとしてなら泪の方が遥かに神に愛されているだろう。

コニーと比較しても同様だ。高身長、パワー、テクニク。コニーは万能で王道を極めた神に祝福された天才である。

身体の成長という如何ともし難い部分において、綾乃が泪やコニーに追い縋れる余地は微塵もない。

では、綾乃を孤高の覇者足らしめている要素は何なのか。

眼だ。綾乃の眼は幼少期から綿密に施された訓練によって、人が至れる限界の一步先の領域に達している。

併せて、他に追従を許さない動体視力と反射神経が常軌を逸した反応速度を実現させた。

これらの武器を用いて相手の呼吸を破壊し、思考能力を奪い去って戦意を喪失させる

「さあここからだよ、アヤノ！」

「いいねえ、コニーちゃん。ちゃんと最後まで私を愉ませてね？」

サービスはコニーに移り、トントと柔らかな軌跡を描く。

綾乃はヘアピンで打ち返し、コニーはバックハンドで大きく腕を振り上げ広い展開へ。

一手一手綾乃を探るように試合を運ぶコニーの集中は過去最高へと変貌し、伴ってプレーから無駄が削ぎ落とされ技量が洗練されていく。

一秒一秒ごとに自分が進化していくことが分かる。希求する力が手に入る。嬉しい。楽しい。面白い。コニーは綾乃という選手と試合できたことに感謝し、必ず叩き潰すと己の魂へと誓う。

「180 — 180！」

(追い付いた！)

遂に綾乃を射程範囲内に捉えた。

流れ出る汗を厭わず走り続けたコニーの疲労はほぼ限界に近いが、かつてない興奮に身体は昂りを抑えられない。

止まることなど考えられない。

このまま勝利を掴み取ってみせる。

ふ、と翠緑の双眸が醒めるのを、ただ一人綾乃の本気と対峙した泪だけが知覚した。「終わったな……」

泪が眩くと同時。

綾乃が動いた。

ギョツ！ という踏み込みから力が脚から腰に、左腕へと伝導。

放たれるスマツシユにコニーは瞠目する。

(強打!?!?)

この試合で初めて見せた強打に反応が遅れ、なんとか返したシャトルは甘く打ち上がる。

刹那で身構えたコニー。綾乃を見る。理解不能な光景に硬直した。

コニーならネット前に詰めてプツシユする場面だ。確実を期つした戦法を見逃す道理はない。なんとしても拾うと意気込んでいた。

だというのに、綾乃はラケットを振り上げてすらいない。

「路ちゃん命名その1——流星りゅうせい花火はなび」

むしろ逆、思い切り仰け反りシャトルを天高くへと打ち上げたのだ。

「は……?」

真上へとコニーは視線を奔らせる。

何だこれは？ 意図が分からない、意味が理解出来ない。この場面でクリア？ いやそれにしても浅い。ここにきて遊び球？ ……だとしたら屈辱だ。狙いが何だろうと、絶対に後悔させてやる——!!？

一瞬で着弾点へと移動しラケットを振り上げるコニー。
上だけを見ていたコニーはやつと異変に気付いた。

(…………え？ ネット直上…………ツ!!?)

落下の軌跡を読んだコニーは慌ててラケットを戻して一步後退。
ラケットを下手にシヤトルの行方を追うコニーは、やがて抗いようの無い真実に突き当たる。

——無理だ…………拾えない。

シヤトルが白帯に被さり。

一步も動けずコニーのコートへと突き刺さった。

啞然と固まるコニーを他所に、こきつ、と首を鳴らした綾乃はラケットを肩に乗せる。

「まつ。それなりには愉しかったよ、コニーちゃん」

青筋の亀裂がコニーの顛顛こめかみに刻まれた。

「は？ もう勝った気？ 調子に乗らないでよね、アヤノ！」

再開するラリー。必死に耐えながらコニーは思考する。

(あのショットは打たせたらダメだ……)

天上より降り落ちる流星の如き一打。ほぼ垂直で落ちるため返球のしようがない。上からはオーバー・ザ・ネットで叩けず、下からは十中八九ネットに引つかかるかタッチ・ザ・ネットで失点し、運良く相手コートに返せても確実に体勢は崩れているから詰みまではあつという間。文字通り、手も足も出ない。

あのショット——流星花火を打つには幾つか条件があるのだろう。角度を少しでも無くすためにネット寄りで打つ必要があるはず。

ならばするべき事は簡単だ。

攻め続けるのみである。

「ふっー」

スマッシュの連打で綾乃を翻弄。詰まらせてネット前の至近距離から仕留める算段。

「はあ……」

嫌に大きく聞こえた溜め息。

綾乃はつまらなさそうに。

思い通りにはもうならない。

(返球が、全部ボデイ狙いッ!?)

ここにきて正道へと立ち返る綾乃の攻めにコニーは苦戦を隠せず、意地でも打ち上げ

てはならないと無理やりドライブを放つ。

ストレートに入った緩いドライブ。

綾乃の口角が僅かに上がった。

「路ちゃん命名その2——落^{らっかせい}下星」

ヒュンと振り抜かれたラケットはシャトルを真芯で撃ち抜く。

床と平行に宙を翔ける白線は中央を横切る白帯へ。

ガツ、と衝突した羽は微かに跳ねた。

「なっ……」

コニーの脚が動かない。まるでフロアに張り付いたかのようにピクリとも。

柔らかにゆっくりと落ちるシャトルに手を伸ばしても、どうしようもなく遠くて届かない。

コトン、と羽が鳴った。

「これでマツチポイント。さあ、どうするコニーちゃん？」

未だ余裕を残す綾乃に対し、コニーは今ある全力を振り絞っていた。

強過ぎる。強過ぎるのだ。

化け物染みた強大さ。

これが、羽咲有千夏の娘。

これが、羽咲綾乃。

「……あはっ」

——これが、私のお姉ちゃん！

「あははははは！ 最高だよ、アヤノオオオ！」

予想を裏切らない凄まじい強さ。

コニーは全身が震える感動で諦めを吹き飛ばす。

まだ終わらせない。まだ終わっていない。一泡ふかして相手を地に伏れさせ勝利の美酒を味わってこそコニー・クリステンセンだと、この場で証明するまでは終わらない

——！！？

「ふーーーーーっ……」

一息で集中を引き戻し、持ち得る限りの気概を充溢させ獰猛に眈を決するコニーを見て、綾乃の面貌に消えかかっていた笑みが帰ってきた。

もう一点も落とせないコニー。その顔に焦りは一片も無く、ただ楽しさだけが映る。攻めは苛烈に、護りは強固に、この試合一番の動きで綾乃へと立ち向かう。

最後の最後で訪れた望外の展開に、綾乃は笑顔で自ら地獄へと踏み込む。全身の筋肉が悲鳴を上げようと、喉が張り裂けそうになっても、肺が張り切れようと綾乃は止まらない。

両者互いに譲らなかつた。

まさに死闘。

ラリーは驚異の二分間を超え、永遠にこの時間が続くかと思われた。

だからこそ、決着は唐突で。

無理があつたのだ。体重が重い分、掛かる負担は軽量級選手の比ではないから。

コニーの脚が死んだ。

「あつ……」

がくんと落ちた身体。

宙へと打ち上がるシャトル。

綾乃は飛び上がった。

「路ちゃん命名その3——うつろほし虚星」

コンツ、というおかしな打音。

虚しく響いたその理由を、コニーは驚倒と共に理解する。

(面を縦に、フレイムでシャトルを……)

人間業ではない。

綾乃はスマッシュと同じフォームで、刀で切るようにシャトルのコルク部分をフレイムで叩き打つたのだ。

あの後疲労から動けなくなったコニーを泪は唯華同伴で尋問かのように有千夏について問い詰めたのだが、当人から得られた情報は思ってた以上に少なかった。

今何処にいるのかは分からず、コニーが控えていた電話番号にコールしても繋がらず、ほぼ成果なしと変わらない結果に終わっていたのだ。

個人的な理由から有千夏に物申さないと気が済まない泪の気持ちを知っていたが故に、この結末に唯華は滅多にない落ち込み具合で消沈していた。

「いや、構わないさ。面白いもんも覗けたしな」

泪もせつかくの手掛かりが不発に終わったのは残念ではあったが、同等の価値あるものを覗けて満足していた。

少し離れた場所に向かい合う綾乃とコニーを見る。

「今日の綾乃はたのしそだったからな。私たち以外にも相手が見つかったのは良いことだろう」

「……そうね。コニーは同級生だし、本当に良かったと思うわ」

一度身内と見なせば情の厚い唯華だ。不安定で純粋なまま歪んでしまった大切な妹分を、慈しむように柔らかく微笑む。

本来の目的は達せられなかったが、この出逢いは綾乃を真の意味で救うきっかけとなるかもしれない。それだけでも充分な収穫であった。

「もう遅い。今日はありがとな。また会おう、唯華」

「ええ、こつちもありがと。またね、泪。気を付けて」

泪と唯華は握手を交わし、再会を約束して別れを告げる。

そして、綾乃とコニーも。

「じゃあねコニーちゃん。またいつか会えたらその時も遊ぼうね」

「う、うん……」

あまりにもあつさりした別れ文句に、コニーは手をもじもじさせながら縮こまってしまふ。

本当は伝えたいことがある。だけど勇気が出ない。拒絶されたらどうしよう、見向きもされなかつたら立ち直れない。

コニーの葛藤を感じ取ったのか、それとも唯の気紛れか、綾乃は思い出したように手をポンと叩いて振り向いた。

「そうだコニーちゃん。私、言い忘れてたことがあつたよ」

「な、何??？」

つい勢い込んで顔を輝かせるコニーに、綾乃は振れること無く自然体だった。

「私、弱い妹は要らないから」

「!!??」

コニーは震えた。

俯いて、全身をかき抱き、とても長い時間そうやって震えを抑え。

顔を上げた時、コニーはひどく不恰好な笑みを浮かべていた。

「じゃあ、私が強くなったら、認めてくれる……お姉ちゃん？」

「そうだね。その時はお姉ちゃんが何か一つ、妹のわがままを何でも聞いてあげるよ」

「……分かった。絶対、絶対だからね!!？」

夕闇に暮れる坂道に行く四人の背中を、見えなくなるまで手を振って見送る唯華とコニー。

騒々しくも賑々しい特別な一日の終わりを肌で感じ、唯華はうくんつと空に手を上げて伸びをした。

「行っちゃったね、コニー」

「うん……」

「……何かあったの、コニー？」

唯華は優しく問い掛ける。

急かすことなく、黙り込んでも辛抱強く、唯華はただ静かにコニーの言葉を待つ。

「……アヤノがね」

「うん」

「……弱い妹は、いらぬ……って」

「……うん」

「でもね……強くなつたら、認めてくれるって」

「うん」

「……お姉ちゃんが妹のわがままを、何でも一つ聞いてくれるって」

「……それで、コニーはどうしたいの？」

首をかして優しく微笑む唯華に、コニーは言う。

「家族になりたい！ アヤノとママと一緒に、三人で暮らしたい!!？」

「……そつか。じゃあ、頑張らないとね？」

「うん！ 頑張って、……頑張って……うああああんつつつ!!？」

我慢していた様々な想いが決壊して、コニーは涙を流しながら唯華に抱き着く。

優しく抱擁を返す唯華はよしよしとコニーの背をさすって、幼子を慰めるように慈愛を持って言葉を紡いだ。

「まったく、手のかかる末っ子だこと」

泣きじゃくるコニーを慈しみながら、唯華は今回の顛末を思う。

良かった。話の途中では戦慄を覚えたが、人形を自称する綾乃にも、暖かい人の心が

戻りつつあることを知れた。試す言動に対してコニーが絶望せず、気丈に振る舞えたのも僥倖だった。その時の対応を間違えていれば、綾乃に慈悲は無かつただろう。その結果コニーは救われて、一段と心の距離を近づけることが出来たのだ。

コニーが越えるべき壁は高い。

今日の試合で点数は鬨ぎ合っていたが、綾乃は本当の全力ではなかった。

唯華が知る限り、最強の手札を二つ以上は隠している。

今は言う時ではない。

そう。今はただ、末っ子をあやすことが第一と、唯華はそつとコニーを抱き締め返した。

窓から映る後ろへと流れていく景色を綾乃はのんびりと眺める。

(やっぱりみんなとバドミントンするのは愉しいな……)

泪、唯華、路、海莉の四人との交流は去年の冬頃。皆がみな綾乃のことを思い思いに可愛がつてくれ、何よりバドミントンでも対等に最後まで決死の覚悟で戦ってくれる。それが本当に嬉しい。

今日はその枠にコニーも加わった。最初は母が育てた遊び相手の一人という認識だったが、最後に魅せた凡夫とは一線を画す実力と絶望にも腐らない頑強な心根を綾乃

は認め、らしくもない約束を交わしたのだ。

綾乃は隣で腕を組んで眠る泪を見る。

こんな愉しい一日を送れるようになったのは泪のお陰だ。泪が綾乃を連れ出してくれたから。唯華や路と引き合わせてくれたから。母がいなくなつてから一人ぼっちだった綾乃は、心の底から泪に感謝していた。

泪には泪の目的があることを知っている。母に何を言いたいのか詳しいことは聞いていないが、正直その点はどうでも良かった。

綾乃は母との別離を悲しんではない。

いなくなつた日。やっぱりこうなつたかと思わなかつた。

(でも、今なら言えるよお母さん。私にもバドミントンの友達が出来たつて) 夜空に瞬く星々の輝きを見上げる。

しばらくぼーつとした後、眠気に微睡みながら綾乃は静かに目を瞑つた。

第4話 再会

その日のことを、今でも時折思い出す。

出逢いからして最悪だった。

同級生に初めて負けた。

何度も挑み、返り討ちにされ、敗因を考え、自身を見直し、練習に取り組み、再度挑み、また負ける。

つまらなさそうにバドミントンをするその娘を見るとイライラした。

そうさせているのが自分だと思ってもっとイライラした。

自分は強くなっているのだろうか？ 君は強くなっていると周りは言う。

ではなぜあの娘には勝てないのだろうか？ あの娘は天才だからと周りは言う。

ふざけるな。何が天才だ。天才だなんて認めない。あの娘を倒すために自分は努力してきたのだ。だからそんな戯言は聞きたくない。

猛りを糧にまた挑み、そして負ける。

一年以上繰り返したそんな日々。

ある小さな大会でそれが終わった。

練習試合ではなく公式戦でその娘と試合をするのは初めてだった。こんな機会は滅多に無い。

必死に練習して、毎日走り込んで、寝る間も惜しんで研究して。

結果、当日に風邪をひいた。

あまりの不甲斐なさに頭が沸騰していた。

あり得ない暴挙に出てその娘に風邪を移した。

スポーツマンシップの風上にも置けない方法で条件を対等にした。

そして、無様に負けた。

こういう趣向は初めてで面白いね、とその娘は嗤った。

手加減されていたと初めて知った。

心が折れた音を聞いたのも初めてだった。



古き良きキーンコーンコーンというチャイムを合図に、午前中の授業が終了した。

勉強道具を机にしまい、生徒たちは各々行動に移っていく。弁当を取り出す者、購買や学食に駆け出す者、他クラスに移動する者と様々で、中学の頃とは自由度が桁違いだ。

この春入学した一年生も早くも高校生活に順応したのか、一年四組で勉学に励んでいた綾乃もカバンから弁当を取り出していた。

「エレナー、お昼一緒に食べよう?」

「いいわよ、のり子は?」

「のり子ちゃん、今日は用事があるんだって」

「あつ、そうなの?」

紫に近い長い黒髪を靡かせるおでこを出した少女——藤沢エレナは、幼馴染である綾乃とお昼ご飯を食べるために机をくつつける。どちらもお弁当派なので移動することなくお昼休みを過ごすのが二人の日常であった。

「こうしていると中学の頃とあまり変わり映えしないわね」

「私はエレナと一緒にのクラスで嬉しいよ?」

「まあ私も気楽ではあるけどね」

綾乃の直球な好意に少し照れながら、エレナは包みからお弁当箱を取り出す。

エレナとしても綾乃と同じクラスなのは嬉しいのだが、綾乃の交流の輪が広がらないだろうことには懸念を抱いていた。元々閉鎖的な子ではあったのだが、中学のある出来事を経てその傾向に拍車が掛かっており、エレナともう一人の幼馴染であるのり子だけでは如何ともし難い現状なのだ。

去年の秋に心許せる先輩方が現れたお陰で少しはマシになったが、未だに綾乃の排他的な態度は完全な改善とは程遠い。

まあ今すぐどうにかなる類いの悩みでは無いかとエレナはその懸念を頭の隅へと追いやり、とりあえずは目の前にあるお弁当を片付けようと両手を合わせた。

『いただき』

「見つけましたわ、羽咲さん！」

『……ま、す？』

教室に響く心当たりのあり過ぎる名前。それにしては聞き覚えの無い声。

綾乃とエレナは揃って首を傾げ、名前を呼んだであろう誰かへと視線を移す。

平和なお昼が音を立てて崩れ去るのがエレナにはなんとなく判った。

「安心しましたわ、やはり北小町に入学していましたのね？」

教室の静寂を派手に破った闖入者はそのまますんずんと歩き進み、一直線に綾乃の元へとやって来た。

人違いではなかったかとエレナは初めて会うその人にどう対処したものかと一度止まり、声を掛けられてる本人の反応を待つ。

綾乃は更に首を傾げていた。

「……誰？」

「なっ!? 私わたくしを忘れたんですの!? 同じクラブチームにいたこの私をつ!?」

「クラブチーム？」

ほぼ直角に曲がった首を戻す綾乃。

相手の口振りから本当に自分の知り合いなのではと思っ直した綾乃は、風景に溶け込む色の無い他人という認識を改め眼前の人物を着色する。

二つに束ねた桃色の髪に、頭部を更に彩る可愛らしい赤いリボン。髪と同色の勝気な瞳に、北小町高校の制服を着こなす綾乃よりは成長に富んだ女性らしい身体。先程から耳朶を震わすお嬢様口調の声。

クラブチームというワードをヒントに記憶を漁り、該当者の存在を思い出し、うろ覚えだった名前を確定した綾乃は手をポンと叩いた。

「生え際薫子ちゃんだ！」

「芹ヶ谷薫子ですわよっ!!? 貴方なんて最悪な間違え方してるんですの!?」

薫子は綾乃に掴みかかった。

当然の流れだった。

「意味がわからない」

無然と呷く薫子を余所に、綾乃とエレナは遮られた食前の祈りを捧げ両手を合わせる。ばかりと蓋を外し箸を手を取った両者は、早速とばかりにお手製の料理を口に運んだ。

よく噛んで食べる習慣が身に付いている綾乃は小さな口でゆつくりと食べ進め、エレナは綾乃のペースに合わせて手を動かす。

もぐもぐごつくんという音が聞こえそうな気不味い沈黙の中、ふと綾乃は薫子を見た。

「あれ？ 薫子ちゃん食べないの？」

「なんで私が一緒に食事することになってるんですの!?!?」

激しく同意するエレナ。もうやだ早く昼休み終わらないかなとまで思い始めていた。

私とあなたは友達じゃないし私の友達とあなたが友達なのかもよく分からないという一種新しい場シチュエーション面に、エレナは黙り込むしか選択肢がないのだ。

「ええー、だつて薫子ちゃんが話があるって言うから」

「場所を変えようといった発想は無いですの？」

「え？　なんで薫子ちゃんのためにご飯我慢しないといけないの？」

「辛辣!!？」

バドミントンと大凡関わりのない日常会話を綾乃としたのはこれが初めてであったが、まさかここまで的確なハートブレイク発言が出てくるとは。しかも素で。天性の煽り士と言わざるを得ない。

だが悔るなかれ。一度木っ端微塵に砕け散り、不死鳥の如く再生した薫子の精神は生半可な口撃では破壊不可能なのだ。

なけなしの自制心を働かせて薫子は思う。

昼食にしよう。

「それにしても……」

市販のサンドイッチの包装を開ける薫子は、綾乃の弁当を見て感嘆の声を上げた。

「羽咲さんのお弁当は随分と彩り豊かですのね……」

主菜の白米にたんぱく質となる肉類や魚介類、副菜にはトマトやブロッコリーなどの野菜を散りばめた食べる人への思い遣りに溢れる栄養バランスの取れた弁当だ。

思わず感心してしまった本性がゲスな薫子はハッと気を取り直し、つい反射的に鼻で笑ってしまった。

「随分とお母様に愛されてるんですね？」

「なっ……」

その発言に対し過剰な反応を見せたのはエレナだった。

「ちよ!!? あなたなんてこと——」

「何言ってるの薰子ちゃん。これは私が作ったんだよ?」

「なっ……なんですって!!?」

「薰子ちゃんはコンビニのサンドイッチなんだね? まあ女子力低そうだし……」

「きいいいいいい!!? 言わせて置けば! 私だって料理くらい余裕でこなしてみせますわ! ……なんですのそのキョトン顔は?」

「泥団子作りと勘違いしてるのかなって」

「張つ倒しますよ貴方!!?」

怒鳴りかけたエレナは怒鳴り暴れる薰子と成すがままの綾乃を見てその矛先を失う。エレナの中で最大級の禁句タブに触れた薰子に言いたいことは多々あったが、今更掘り返すのは最も愚かだと弁えていたエレナは渋々口を噤んだ。

「それで薰子ちゃん、話ってなんなの?」

一頻り制裁を終えた薰子は苛立ちの残滓をサンドイッチと一緒に呑み込んで、綾乃の疑問にやつと本題に入れると口を開いた。

「私と一緒にバドミントン部に入って欲しいのです」

——ガタンッ！ と烈しい音を立ててエレナが立ち上がった。

纏う空気が様変わりしたエレナを中心に教室から音が消える。静まり返った異様な空気に薫子も半ば飲まれており、綾乃だけが親友の異変に頓着せず箸を動かし続けた。

「芹ヶ谷さん」

「な、なんですか？」

「話があります。ついて来てください」

有無を言わせぬ冷然とした口調に薫子は二の句が継げない。

待つ気もなく拒絶も許さない態度でエレナは箸を置き、綾乃に少し出るからと言い残してから教室を出て行く。いつてらっしやーいと呑気に言う綾乃は後ろ姿のエレナと側で固まつてる薫子を見ており、この場で動かないのは無理と悟った薫子は大人しくエレナに追従する。

廊下を歩いて階段を上がり、屋上へと繋がる扉がある誰もいない空間へと辿り着いたところでエレナは薫子へ振り向いた。

その瞳には明確な怒りが宿っていた。

「芹ヶ谷さん、もう綾乃に関わらないで下さい」

「……なぜ貴方にそんなことを言われなければいけないんですか？」

移動の間に平静を取り戻した薫子は当然の疑問を問う。

エレナが綾乃と仲が良いのだろうことは察せたが、それとこれとは話が別だ。自分が遠慮する理由にも要望を受け入れる理由にもなり得ない。

そもそもここまでエレナが憤懣を募らせたのが薫子には謎だった。自身の知らない地雷を踏み抜いたのだろうが、それにしても綾乃の態度があっけらかんとし過ぎてい

る。
本当に意味が分からないという顔をする薫子に、エレナの敵視する眼差しが少し和らいだ。

「……どうやら知らないみたいですね」

「羽咲さんのことですか？ まあその通りですわ。私が知っている羽咲さんはバドミントンの天才だということ、それだけですわ」

忌々しそうに吐き捨てる薫子。

深い事情を知らないと分かったエレナは裡から湧き上がる怒りを宥めて、然れど意思は変えずに薫子に言う。

「じゃあ言い方を変えます。綾乃をバドミントン部に参加させようとするのをやめて下さい」

「それは出来ませんわ」

即答だった。迷う素振りの無い断言。

エレナの目が鋭利なものへと変貌する。

「……どうしてもですか？」

「どうしてもです。これだけは引けない一線です」

薫子の意思は堅い。絶対に曲げられないと言葉の強さから理解できる程に。

これでは平行線だ。

薫子が秘めている万感の想いをエレナは知らない。

エレナが隠している真実と綾乃を慮る想いを薫子は知らない。

「……藤沢さん、でしたよね？」

「ええ、何か？」

「せめて理由を教えてくださいませんか？ 貴方が私ほど単純な理由で動いているとは思

えません。なんなら先に私から話しますが？」

「……」

エレナは即座に返答できない。親友といえど綾乃は他人だ。許可無く個人のデリケートな問題を口にするのは躊躇われた。

はあ、と薫子は溜め息を一つ。仕方ないと話し始めた。

「では勝手に話しますわ。とはいっても、そこまで大層なお話ではありませんが」

薫子の望みは綾乃をバドミントンで負かすこと。その経緯と切っ掛けしか話すことはない。

「……とまあどうしても勝ちたかった私は、今にして思えば最低な方法で羽咲さんと条件を対等にしてボロ負けしました。その時初めて知りましたわ、羽咲さんが実は左利きだったと。」

問題はその後。羽咲さん、こんなこと言ったんですよ？ 『薫子ちゃん面白くないだけ、バドミントンをして楽しいと思つたことは一度もない』つてね」

これには流石の薫子も心が折れた。風邪が治つた後も一週間は引き籠もり、無気力で刺激の無い平和な日常を過ごす羽目になった。ぬるま湯の毎日がつまらな過ぎて気付けばラケットを握り、バドミントン漬けの日々に戻るのは早かつたが。

「その日から羽咲さんと試合することはありませんでしたが、去年の秋にこのまま同じ環境で練習を続けても勝てないと悟りました。」

だから私は態々志望校を変え北小町に入学し、羽咲さんと一番近くで過ごしながらバドミントンをやり、羽咲さんの全てを分析して徹底的に懲らしめてやりたいと思つた。……これが私が羽咲さんを部に誘う理由ですわ」

自己中の極みにして傲慢の塊。

他人の都合などどうでもいい。薫子はただ自分の願望を叶えるためだけに、羽咲綾乃

にバドミントン部に入つて欲しいのだ。そこに友情などという鼻で笑つてしまうような甘い感情は無く、敵愾心や復讐心といった醜い負の側面しか存在しない。

そして薫子の執念を形にするには、部活動という環境が最も効率的かつ効果的だった。だから薫子は此処にいる。

「……ちなみになんですが、なんで綾乃が北小町に入学するつて知つてたんですか？」

「あら、ライバルの動向を探るのは当然のことですわ？」

——コイツ堂々と正面切つて探るつて言いやがった！

何一つ悪びれること無く飛び出たストーカー宣言にエレナは慄き、身の上話を終えた薫子は腕を組んで壁に背を預け聞きの姿勢を取つた。

「次は貴方の番ですわ。羽咲さんをバドミントン部に参加させたくない理由を教えてくださいだきます。言つておきますが、話してくれないのであれば勝手に調べますわ」

どうやら交渉ごとは薫子の方が上手らしい。あんな発言を聞いた手前、ここで口を噤んでも意味を成さないとエレナは判つてしまった。

思惑通りに動くのは癪だが、言い返したいこともある。

分かりましたと一呼吸空けて、エレナはまず問いを投げた。

「芹ヶ谷さん、綾乃がそのクラブチーム入つたのがいつ頃か覚えていますか？」

「ええ、中学一年の夏でしたわ」

「……綾乃はその前までは中学のバドミントン部に所属してました」

同級生にボコボコにされたのに加え、クラブチームに入るには微妙な時期だったのでよく覚えていた。

出逢った時から恐ろしく強く、つまらなさそうにバドミントンをするその姿も。

「ふん、どうせ人間関係で何かあつたんでしよう?」

「……その通りです。綾乃はバドミントン部を崩壊させました」

「はっ! 崩壊とききましたか。まああつても可笑しくはないですわね」

「……驚かないんですね?」

「どうやら貴方はバドミントンをする羽咲さんを知らないようですね。羽咲さんはね、バドミントン選手のを殺すのがとてもお上手なのよ?」

同じ年頃の少年少女と来れば尚のこと。メダカしかない水槽に柵の無いホオジロザメを放り込んだ結果なんて、考えるまでもない。

無邪気に、無自覚に、心が成長し切つてないから何が悪いのかも分からずに、綾乃は他人の心を喰い千切つて弱さを叩き付ける。

「まさかそれが理由ですか? なら心配要りませんわ。羽咲さんはそんなことトラウマとも何とも思つていない筈ですから」

「……あなたに綾乃の何が分かるんですか?」

「分かりますわよ。私が羽咲さんの立場だったらそう思っているからです。業腹ですが、私と羽咲さんは本質的には似てるんですよ」

方向は違えど、どちらも自分本位な人間だ。

綾乃だって、上手く立ち回れば穏やかな人間関係が築けただろう。自分が孤独なのは周りが弱いからと責任を他者に押し付ける辺り、綾乃の闇は深く濁っている。

「……嘘です」

「……何がですか？」

「綾乃が何も思っていないなんて！ それに私が見た綾乃はバドミントンを楽しそうにやっていますよ！」

「とても信じられませんわね」

エレナはカチンときた。知った風な口を利く薫子に目に物見せてやろうと憤慨した。

携帯を取り出し画像ファイルを漁り、目当ての思い出を掘り起こしたエレナは薫子に突き出す。

「これを見てもまだそんなことが言えますか？」

「はあ、なんですかいった……なっ!?!?」

画像が脳に染み込んだ故に硬直する。

エレナから携帯を奪い取りまじまじと見詰め、他人の空似ではない本人だと確信した。

(ま……益子泪、志波姫唯華、津幡路?!? もう一人は益子泪のパートナーの旭海莉ですか?!? 何故羽咲さんがこの方々と?!?)

錚々たる面々に絶句する。

現女子高生バドミントン界における最強たちと、昨年その名を轟かせた神童の揃い踏み。何がどうしてこんな光景が生まれたのか薫子には理解の外だ。

驚いている薫子に満足したエレナはふふんと自慢気に笑う。

「どうですか? この人達とバドミントンしてる綾乃はとても楽しそうでしたよ?」

「……それはまあ、そうでしょうね。同世代の最強ですから、羽咲さんを満足させるには充分……」

「えっ? 最強?」

「一番右の旭海莉を除いたこの三人、益子泪、志波姫唯華、津幡路は『三強』と呼ばれていて、女子高生バドミントン選手の中で最強なんですよ。……特にこの方」

薫子は綾乃に腕を組まれて微笑んでいる泪を指差す。

「益子泪は去年の全日本ジュニア、簡単に言う所高校二年生以下の大会における覇者に

して、今年の春の選抜の王者。最強の中の最強ですわ」

「なっ……涙さんつて、そんな凄い人だったんですね」

エレナから見た泪は綾乃のお姉さんでしかなかったが、他二人含めてそこまで全国的に有名で強い選手だとは知らなかった。綾乃が真面にバドミントンをしてる姿を見たのも初めてに近い。

エレナがその場にいた理由は完全に警戒心からだった。

エレナやのり子という時以外は機械のように毎日を過ごしていた綾乃が、突如エレナに相談を持ち掛けたのがきっかけ。

『エレナ、体育館の借り方教えて』

何を言ってるんだこの子はと詳しい話を聞いてみたところ、綾乃が言うには今度別の県に住んでいる高校二年生の先輩たちがバドミントンしに遊びに来るからその場を確保しなければならぬということだった。

ぶっちゃけエレナはメチャメチャ怪しんだ。

同級生でなく高校生、しかも他県出身を名乗る不屈き者。自分たち以外の綾乃の友人を知らなかった故に、エレナの印象はこれで固まってしまった。

時折ぼけくつと黄昏てる綾乃のことだ。何か良からぬ事態に巻き込まれて騙されている可能性は決して否めない。

体育館を借りることは綾乃の中で絶対となっていたので、エレナは手続き上必要なんだと綾乃を言い包めて無理やりその集まりへと参加したのだ。

結果エレナは罪悪感に押し潰された。

もう本当に良い人たちだった。包容力の塊みたいな志波姫唯華、姉御肌の津幡路、優しく見守ってくれる旭海莉、もはや綾乃の姉にしか見えない益子泪。全員が全員、器の大きい尊敬すべき先輩方だった。

自分はなんと愚かなことを考えていたのだろうと、綾乃が嬉しそうにエレナを紹介する度に心が痛む。綾乃が楽しそうに先輩たちと笑い合うのを見ると、場違いな自分を申し訳なく感じる。

耐え切れなかったエレナは綾乃が席を外した隙に謝罪した。自分はあなた達を疑っていたと。

すると泪たちはしばし固まって、確かにと頷いた。

『言われてみれば超怪しいよね私達？』

『私も引つ込み思案な友達がそんなこと言ったらあわや通報ものだわ』

『最近は何騒な事件も多いし、これは私たちの配慮が足りなかったね』

『でも安心したな。綾乃にもそういう友達がいて良かった』

女神かと思った。心の底から信頼した瞬間だった。

そんな経緯で六人は交流を深めたのだ。

「とはいえ、これで分かりましたか？ 綾乃はバドミントンを楽しむことが出来てます。無理に部活に参加する必要はありません」

エレナは薫子から携帯を奪い取り胸を張って結論を述べる。

面食らっていた薫子はエレナの言い分に納得して仕方ないと引き下がる。

……そんなことはなかった。

「はあ……貴方を説得出来ないのは分かりました。もう部外者二人で話し合っても意味はありません」



「あつ、やっと戻ったの？ もうお昼休み終わっちゃうよ？」

五時限目の準備をしていた綾乃は帰ってきたエレナと薫子に声を掛ける。

神妙な顔をして近づいて来る二人。

疑問符を浮かべながら首を傾げる綾乃。

切り出したのは薫子だった。

「羽咲さん、私と一緒にバドミントン部に入りましょう」

「愉しそうならいいよ」

「えっ!?? 本当ですかの!??」

「うん、愉しかつたらね」

驚くと同時に薫子はやはり自分の考えが間違つて無かつたことを察する。中学の頃の出来事など綾乃はこれっぽっちも気にしていないと。

「綾乃、本当にいいの?」

「うん。大会に出場する手続きとかもよく分かんないし、高校なら泪ちゃん達みたい**に**強い人もいるかもしれないから」

「……そう、分かつたわ。私も付いて行っていい?」

「いいよー!」

この日の放課後、綾乃は再会する。

全日本ジュニアで出逢つたとある選手と。

第5話 北小町高校バドミントン部

北小町高校バドミントン部。

現世界ランク8位である赤羽玲二を排出し、卒業生にはインターハイ男子個人戦シングルスを制覇した者もいる学校内でも実績ある部活だ。昨年のインターハイにおいても女子シングルスにて県代表となった選手がおり、確かな実力者がいるのだが……。

「ぶ、部員が少ねえ……!?」

現在は存続の危機に陥っていた。

「男子二人に女子四人……このままだと男女共に団体戦すら出れなくなってしまう……」

想像以上の切羽詰まった状況に、北小町高校バドミントン部コーチを務める立花健太郎は天を仰いだ。いくら設備等がそれなりに整っていても、人数が少な過ぎるこの環境は選手たちに良くない。

バドミントンは究極的には個人競技だが、スポーツにおいて一人きりで行えるものなど存在しない。特に中高における部活動では切磋琢磨する仲間や先輩後輩の関係性が

ら生じる責任感など、凡ゆる要素が絡まり重なり合うことで予想を超越する成長を遂げる事だつてある。最後の大会で異常な成果を出す三年生や、部の期待を全て背負つた主将の強さは容易に限界を超えていくものだ。

だというのに、北小町高校バドミントン部ではそんな思春期特有の環境が崩壊していった。

責任の一端を担っている健太郎はこれ以上強く出れない。彼の厳しい指導の所為でやめた部員がこの一ヶ月で八人もいるのだ。バドミントンに対して妥協出来ない性分が引き起こした悲劇とはいえ、このままではマズイ事には変わらない。

「なあ、泉」

「はい、なんでしようコーチ？」

「新入生向けの部活動紹介みたいなイベントはもうやったんだよな？」

健太郎の問いに部のまとめ役である泉理子は苦笑いを浮かべる。

「はい。宣伝できるポイントは全部言つたのですが……」

「新入生が一人も来ないというわけか……」

その事実には健太郎は首を傾げずにはいられない。奇妙にも思っていた。

偏見も混じっているが、バドミントンはそこまで敷居が高いスポーツではないだろう。日本ではサッカーより競技人口が多いことから、気安くというのは誤解を生むが

高校から始められるスポーツの一つである。

新入生が一人も、しかも仮入部にすら現れないというのは違和感しか覚えないのだ。

「まあここで嘆いても仕方がないか……よし、練習始めるぞ」

健太郎の指導の元、少ない部員たちは練習に勤しむ。

バドミントンは敷居は高くかもしれないが、そのハードさは群を抜いている。常に走り続けられる体力に細かなフットワークに耐えられる足腰、飛び交うシャトルを捉える集中力に相手を打ち崩す為には絶えず回転する思考力。一瞬も気を抜かず、頭も身体も全部使つて初めて試合が成り立つのだ。

だからこそ日々の練習も重く厳しい。健太郎がコーチに就いてからはより一層であつた。

「荒垣」

「……何？」

「膝の調子はどうだ？」

「問題ないかな。あんたのお陰で大分鍛え上げられたからね」

「そいつは良かった」

主将であり去年のインターハイ及び全日本ジュニアにも出場したエース——荒垣なぎさは勝気に笑う。

女子では日本人離れした大型選手であるなぎさは長い間自己流の調整を行っていたが、同じ経験を積んだ健太郎と出逢ってからはより効率的かつ効果的なものと改善されていた。深刻に悩むようになったのは去年の秋からだが、ここ一ヶ月は成長を感じられていた。

「これならアイツも……」

ぼそりと呟き、なぎさは練習に戻ろうとする。

「全く、羽咲さんの所為でこんな遅くなりましたわ」

「ええー、だって家にラケットバッグ置いてきちやったから取りに行くでしょ普通。大体先に行ってて言ったのに、家まで着いてきたのは薰子ちゃんだよ？」

「貴方がそのままふける可能性を潰したままですわ。……ここが活動場所ですわね。なんかしけてますわねー」

「体育館なんてみんなこんなものじゃないの？」

「そうでもないよ、エレナ。強豪校はね、お金の掛け方が違うんだよ。ここはバドミントン部専用の体育館があるだけマシな方だと思うけどね」

どこで聞いた覚えのある声になぎさは顔を振り上げた。

声の出所に目を向け、開け放たれていた扉の奥を見て、啞然と固まる。

「私たちは入部希望者ですわ。監督はどちら様でしょうか？」

いたのは三人の少女。桃色の髪を二つに結った少女と、紫に近い黒の長髪を靡かせる少女と。

黒髪を一つに纏めた最後の一人。

「は、羽咲……綾乃……」

「ん？」



高校二年の全日本ジュニアで、なぎさは中学三年に負けた。

相手は奇妙な選手だった。防御型のスタイルにも関わらず、やたらとなぎさにスマツシユを打たせようとする変わり者。

どんな球を打ち込んでも返球される嫌な感覚に囚われそうになった。遊ばれているような気分にも陥った。……後で知ったが、実際に手加減はされていた。

試合の最中、ふとそいつはなぎさに言った。

「ねえ、なんで本気で打たないの？」

最初は意味が分からなかった。

自分は全力だ。本気で打ち込んでいたし、相手を崩そうと必死で試合に臨んでいた。馬鹿にされている。そう思ったが、相手は相手でなぎさの体たらくにイラついてるように見えた。

「あなたは細かいこと考えても結果に出るタイプじゃないよ。変に迷ってないで、いいから思いっきり打ってきてよ。じゃないとたのしくない」

断じて認めたくはないが、それが原因で試合中になぎさは吹っ切れた。試合には負けだが、不思議と自信の付く結末を迎えたのだ。

去り際、相手はこう言い残した。

「身体を大事にね。特に膝は壊しちゃダメだよ。久しぶりにたのしかったから、またやろうね。なぎさちゃん」

これが、羽咲綾乃との出会いと別れ。

後日行われた準決勝を見て、なぎさは強く決意した。

次試合する時は、もつと強くなった自分であいつを倒してやると。

そんな相手が目の前にいる現実には頭が痛くなってきた。

「羽咲綾乃です。去年のパコ打ち全日本ジュニアで三位入賞しましたー。愉しかったら入部いたしまーす」

「なんつー自己紹介を……芹ヶ谷薫子ですわ。去年は一応全中に出場しています。羽咲さんが入部するなら入部いたしますわ」

クソ舐めた自己紹介を終えた一年生。一年生としての可愛げはゼロで、両者共に心根から滲み出る生意気さを既に感じさせていた。

しかし、そんな些事が気にならないネームバリューに健太郎は瞳を見開いていた。

「は、羽咲綾乃つて、あの羽咲綾乃か!!?」

「薫子ちゃん、羽咲綾乃つて複数いるの?」

「そんなの私を知るわけないでしょう。……恐らく貴方が思っている通りの羽咲綾乃ですわ」

「うおおおおつ、本当か!!?」

驚く以外ない。バドミントン業界における綾乃は有名過ぎる人物なのだ。

神童——羽咲綾乃。

昨年の全日本ジュニアにおいて中学生で三位まで上り詰めた異例中の異例。準決勝で最強——益子泪に負けはしたが、泪を唯一苦しめた試合として事実上の決勝戦とまで語られてるほどだ。

北小町高校に入学していたとは予想外だった。綾乃なら全国の超強豪校から勧誘されていてもおかしくないのに。

「しかも君も全中出場経験者！　こんな大型新人が二人も入ってくれるなんて！」

つい先程までの悩みが一気に氷解される。人数確保に加え実力ある経験者にして扱いにくそうな後輩というオプシオン付き。綾乃と薫子は停滞している状況を刺激するには十二分な要素が詰まっていた。

感動に震える健太郎や新入生の登場に嬉々としていた上級生だが、彼らのことを見回して薫子が呟く。

「それで、他の部員の方々はどこにいらっしやるんですの？」

「確かに男子二人に女子四人しかいないですね？」

綾乃の付き添いで同道していたエレナも薫子と同じ疑問を抱いていたのか、あまりの部員の少なさに首を傾げた。

ギクツ、と固まったのは理子だった。

「あー、そのね。これで全員なんだよ？」

「……は？　全員って、この六人がですか？」

「……そうなの」

「新入生は……」

「二人が初めてなの……」

ぼそぼそと声が消えていく。

理子の言葉がなんとか頭に染み込んだ薫子は呆然と固まり、露骨に溜め息を零した。

「これは想像以上ですわね。選択をミスった気がしてきましたわ……」

「へえ、新入生私たち二人だけなんだね。中学の頃はもつといたのに、高校はこんなもんだ」

部の現状などどうでもいいのか気楽にそう言う綾乃を見て、薫子はまさかの可能性に思い当たり綾乃に向き直った。

「羽咲さん、一つ聞きたいことがあります」

「ん、なーに？」

「貴方、何故北小町に入学したんですの？」

「近かったからだよ？」

「因みに中学も近所のですか？」

「それがどうかした？」

キョトンとする綾乃から視線を外して、薫子は頭痛を抑えるように眉間を揉む。

(新入生がいけない原因は羽咲さんが関わっていいそうですね……)

綾乃が中学の部活動を崩壊させたと聞いたのは今日のことだ。短い期間にどれだけ暴れたのかは知らないが、近隣の同世代の多くが暴虐の餌食となったのだろう。バドミントンを辞めた青少年少女は両手の指では数え切れない筈。

あくまで推測なので口には出さないけれど、恐らくいくら待ってもこれ以上新入生はやつて来ないだろう。

仕方ないと切り替える。薫子の目的は綾乃の近くでバドミントンをすることだ。部員が少ないのはデメリットにはなり得ない。

幸いコーチは実力者であり、主将は確かな力を持っているのだ。

(あれが荒垣なぎさですわね……)

少し離れた場所で綾乃を凝視しているなぎさを横目で収め、のほほんとキョロキョロする綾乃を一瞥。どうやらこの畜生はなぎさに気付いていないらしいと看破する。

一体どういう神経をしているのか。幼少期からの綾乃の教育にさぞ興味を惹かれる薫子だったが、綾乃に距離を詰めるなぎさに一先ず様子見に入った。

「なあ、アタシのこと覚えてるか?」

「え? 誰ですか?」

そこ即答しますっ!? と声にならない絶叫を上げる薫子。同時に、流石羽咲さんはブレませんわねと感嘆していた。

顔を顰めたのはなぎさだ。結構な勇気を振り絞って声を掛けたのに、結果は玉砕である。ぶっちゃけかなり恥ずかしい。穴があつたら入りたいと羞恥で頬を紅潮させた。

どうやら相手は知り合いらしい。そうと分かり本日二度目の思い出し作業に没頭す

る綾乃は、むむむーつとなぎさを見詰めながらふと零す。

「……………え？ 本当に知り合いい？」

なぎさの心に会心クリティカルヒットの一撃！

「……………貴方、本当に覚えてないんですの？」

「薫子ちゃんは知ってるの？」

「ええ、まあ。神奈川では有名だと思いますわ。貴方も絶対知ってるはずよ」

「そうなんだ。おかしいなー、全然記憶から出てこない」

無邪気になぎさのメンタルをズタボロにする綾乃は尚も悩む。

その後十秒間記憶を巡った末に、

「薫子ちゃんヒント！」

粉微塵に砕けたなぎさの心を火にくべるような暴挙に走った。

この時点で薫子はなぎさの顔を直視出来なかった。だが自分のことはすぐ思い出してくれた事実が少しの優越感となり、綾乃の戯れに付き合う気になる。

「ヒントその一、去年の全日本ジュニア」

「……………次！」

「ヒントその二、21 — 0、21 — 8」

「……………もう一声！」

「ラストヒント、ジャンピングスマッシュ」

「——思い出した、スマッシュが強い人だ！」

なぎさは崩折れた。

側で聞いていた理子がぶわつと泣き、健太郎は盛大に顔を引攣らせ、薫子ですら憐れみを視線に宿していた。

手をポンツと打ち、満足そうにけらけら笑うド畜生。他人への興味が希薄過ぎるが故の結末である。どうしてこんな非道と鬼畜を煮詰めた後にスパイスとして屑な人間性を注いだ性格になってしまったのか。

かつて遊んだ記憶だけは思い出した綾乃は、突然しやがみ込んだなぎさに不思議そうな双眸を向けた。

「どうしたの？」

「……いや、うん、なんもない」

この場から逃げ出したい気持ちをグツと堪え、なぎさは立ち上がり改めて綾乃と対峙する。

「主将の荒垣なぎさだ。よろしくな、羽咲」

若干潤んだ瞳でにこりと笑うなぎさ。

同じような微笑みを綾乃は浮かべた。

「まだ入るって決めたわけじゃないよ?」

「よし、練習すつぞー!!?」

健太郎は綾乃の言葉を掻き消すように号令をかけるのだった。



空が赤く染まり夕闇が顔を覗かせる黄昏時。

「よし、集合だ!」

部活動としての終わりを告げるため健太郎は部員を集める。

多くが肩で息をしている中で平然としている綾乃を健太郎は瞥見し、内心息を呑みながら連絡事項を伝える。

「前から言っていたが、今週の土日は俺の知り合いの伝手で合宿を行う。羽咲と芹ヶ谷には急な話になってしまったが、参加は可能か?」

「私は問題ありませんわ」

「私も大丈夫かな?」

「どうやら入部の決意を固めてなくとも参加する意志はあるらしい。正直なところ、楽しければ入部するという綾乃にとつて何が琴線なのか把握出来ていないので健太郎は戦々恐々の思いだったが、比較的前向きな発言に安堵していた。」

二人の賛意も取れたので諸々の連絡を済ませ、部活動としては解散を命じる。

「羽咲さん、この後お時間はありますか？」

「あるけど？」

「もう少し打っていきませんか？ あれでは動き足りないですわ」

「んー、いいよ。ノックで薫子ちゃんがぶっ倒れるまでね」

「さりげに鬼みたくないなと言いますわね……」

せつせとシャトルを集める綾乃と薫子。監督役として健太郎は二人を見守りながら、先の事を考える。

(あの二人が入るとなると練習メニューを見直す必要があるな……)

難しい問題だ。基準を下に合わせれば上の者には練習にならないし、上に合わせれば下の者は着いてこれない。

もう失敗を犯せない健太郎は慎重に検討しつつ、薫子で遊んでいる綾乃を見遣る。

「ほいつ」

「はっー！」

「頑張れ頑張れ」

「ふっ、はっ、ちよっ、まっ」

「走れ走れ」

(羽咲もそうだが、芹ヶ谷の体力も異常だな……)

今日一日で薫子の選手としての腕は大体把握した。純粹な持久走なら部内トップだろう。凡ゆる面における下地が整っており、強豪校においても一線を張れる実力者だ。全中出場は伊達ではない。

だがそれを容易く凌駕するのが神童だ。

「ぜえ、ぜえ、……次は羽咲さんの番ですわよ」

「よし、ハーイ」

身長は物足りない綾乃だが、引き絞られた全身はしなやかで、宿す敏捷性は全国を超え世界にすら通用すると健太郎は考えていた。

更に恐ろしい事に、綾乃の真骨頂はシャトルコントロールにある。ノックは拾う事が第一のいじめのような練習だが、綾乃が返す球はコートの四隅を外さない。気付いた薫子が口角を引き攣らせていた。

「薫子ちゃんもこれくらい出来ないよね」

「上等ですわ……」

再開するノック練習。綾乃は取れるか取れないかの瀬戸際を見極めるのが天才的に上手いのか、体力おぼけの薫子にとつてもかなりの鍛錬になつていようだ。

(あいつ指導者としても才能があるっばいな……まあ、芹ヶ谷みたいな根性がないと話にならないが)

側から見るとこの二人は相性が良い。綾乃がいれば薫子は自然と強くなるだろう。

だからこそ課題は綾乃の育成方法なのだが、こればかりは簡単に答えは出ない。

宿題だなと健太郎は一度切り上げ、汗を流す二人へと近付いた。

「二人とも、今日はその辺にしとけ」

すつかりと暗くなった帰り道を歩く。

ラケットバッグを背負つて並ぶ綾乃と薫子。最悪な再会を果たした割に、纏う空気は思いの外和やかであった。

「それでどうでした？ 久しぶりの部活動は？」

「うーん、まあまあかなー。泪ちゃんたちと比べると物足りないけど」

あの面子と比べられると流石の薫子も怯んでしまう。泪、唯華、路は文句無しに最強の三人なのだ。

それでも薫子はここで引けない理由がある。綾乃に勝つのが最終目的だが、綾乃と同じ高校で部活動に取り組んでみたいという気持ちもまた薫子の本心なのだ。

「……私は充実した練習が出来ましたわ。羽咲さんの球出しはどれもエグいので身になります」

素直になり切れない薫子の発言だが、それでも目一杯デレている。その証拠に、綾乃は記憶に無い薫子の殊勝な態度にパチパチと眼を瞬かせていた。

顔を背けている薫子はそんな綾乃の様子に気付いておらず、街灯に照らされた紅い横顔で言葉を続ける。

「宜しければ、今後も自主練に付き合ってくださいませんか？ 羽咲さんにも必ず、私とのバドミントンが楽しいと思わせてやりますわ！」

自棄になったのか薫子は羞恥を押し殺して、真つ直ぐな眼で綾乃を正面から見詰める。

ここまでやれば普通の感性の持ち主なら、苦笑いを浮かべてしようがないなあと提案を受け入れるところだろう。昼休みにエレナの口を割らせた交渉術を遺憾なく発揮した薫子に口説き落とされ、両者を結ぶ友情を一段と深める図である。

（うーん、どうしよっかな。薫子ちゃんと練習して私にどのくらいのメリットがあるんだらう……）

そしてこの場面で損得を天秤に掛けるのが綾乃である。

眼前の薫子を放置して勝手気儘に懊悩し始めた綾乃に薫子の口許が微振動し始めるが、目にも映っていない綾乃は沈思を開始した。

（壁打ちとかノックマシーンはまだもう飽きたし、薫子ちゃんが手伝ってくれらな新鮮かな？ 対人じゃないと磨けない部分もある。その代わりに自分の時間が無くなる……）

考えて、意外とデメリットが少ないと分かる。

（薫子ちゃんは中学の人たちと違って壊れにくいし。楽しいとまではいかななくても普通に遊べる。もっと強くなるかもしれないし……）

「あつ……………」

綾乃は気付いてしまった。

悪魔の入れ知恵にも等しい画期的なアイデアを。

（そっか、私が愉しくなるように誰かを鍛えればいいんだ！）

盲点だった。この発想は無かった。

自分が母の作り物なのだから、自分も一から人形を作れば退屈しないではないか――

！

綾乃の思考は超速に加速する。

（その点薫子ちゃんは申し分無い！ 体力もある、技術もある、何より根性がある！ 誰

が一番近い……唯華ちゃんだな、うん。なぎさちゃんはコーチに任せれば面白そうだし……)

「薰子ちゃん」

「な、何ですの?」

「私部活入るよ。薰子ちゃんとの自主練も付き合っただけよ!」

「本当ですの?」

「隠し切れない喜色を醸し出す薰子は知らない。綾乃が何を考えているのかなど。」

「ふふふ、愉しみだなあ。お母さんにだって作れたんだもん、私に出来ない訳がないよ」

「笑みを交わし合う二人は歪な友情に結ばれていた。」

「どちらもその友情を間違っていないと思える精神性を持っていたのは、きっと幸いな事なのだろう。」

「これからよろしくね、薰子ちゃん」

「ええ。もちろんですわ、羽咲さん」

第6話 神童

『あや、から、始、まる、リズ、ムに、合わ、せて』

ずんちやつ「かお、4」「かお、かお、かお、かお」ずんちやつ「あや、2」「あや、あや」ずんちやつ「かお0」ずんちやつ「エレ、チエケ」「YO、チエケ、ラツ、チヨウ！」「ずんちやつ「かお、チエケ」「YO、チエケ、ラツ、チヨウ……」ずんちやつ「のり、3」「のり、のり、のり」ずんちやつ「かお、7」「かお、かお、かお、かお、かお、かお……」ずんちやつ「あや、チエケ」「YO、チエケ、ラツ、チヨウ！」ずんちやつ「かお、4」

「——どうして私わたくしばかりなんですのワ?？」

綾乃と薫子が北小町バドミントン部に入部して初めての土曜日。

健太郎が運転する車に乗って合宿先へと向かっていた一行は、案の定車内で荒れていた。

「羽咲さんですわよね、このゲームをやるうって言い出したのは！」

「薫子ちゃんの負けー」

けらけらと笑う綾乃。

あまりの腹立たしさに戦闘態勢に入る薫子。

どーどーどーと薫子を宥めるエレナとバドミントン部初参加の三浦のり子は苦笑を浮かべる。二人は非常時における綾乃の手綱を握る存在として同行を許可されており、早速お役目と経緯を説明しなさいと視線を投げた。

「薫子ちゃん、私の言い分を聞いて」

「いいでしょう」

「きつかけはSNSだったんだよ」

「……とりあえず続けなさい」

どうしようもなく漂う雲行きの怪しさに薫子の口角は既に引き攣っていた。主に怒り。

「このゲームが巷で流行ってるって知って、四人いけば楽しいらしいから暇だしやってみようって」

「ほう。それがどうして私を嵌めるみたいなことになったのかしら？」

「やってみたら意外とつまんないって気付いたから薫子ちゃんて憂さ晴らし」

薫子は綾乃につきか掛かった。

「何やってんだこいつらは……」

「あはは……、でも賑やかで私は好きだよ」

「……はあ」

新しくできた後輩たちの暴れっぷりを呆れた様子のなぎさは、女神のような慈愛に満ちた理子の発言にため息を隠せなかった。

後部座席で取っ組み合う二人をエレナが囁し立て、理子の隣に座っていたのり子がすいませんすいませんと謝り倒す一幕。

こいつら完全に旅行気分だなと健太郎は嘆息一つ漏らし、まあ意外と楽しそうだからいいかと切り替える。綾乃が楽しければ入部すると言っていたので尚更。

向かう先は神奈川体育大学。高校の同窓が在学している伝手で漕ぎ着けた修行場だ。インターハイ出場レベルのなぎさはもちろん、未だ全力が測りきれない綾乃も退屈しないで済むだろう。

「よし、着いたぞー」

予定より少し遅れて目的地に到着する。

互いに頼つペたをぐにぐにし合っていた綾乃と薫子はひとまず矛を収め、連れ立って北小町より遙かに大きい体育館を見上げていた。

「おおー、やっぱり大学って大きいんだねー」

「高校でも強豪校はこのくらいありますわ。まあ北小町より環境が良いことには違いあ

りませんわね」

なんだかんだで世話焼きな性格なのか薫子は綾乃への相づちを欠かさない。自己紹介時点ではどうなるかと内心不安に思っていた健太郎だったが、人間関係含めこの問題児たちは案外馴染んでいた。

「おーい、健太郎!」

「おー! 今回は世話になるぜ!」

ホストである青年に挨拶を述べ、早速とばかりに体育館へと案内される。

道中、青年は申し訳無さそうに頭をかいた。

「あー、あのな健太郎。急に予定が変わってよ……」

「どうやら何か手違いがあったらしい。」

先頭で話し込んでいる健太郎を余所に、綾乃たち一年生たちは後ろでお喋りに興じていた。

「そう思えば。綾乃、アンタここでは全力出すんでしょうね?」

「なんで?」

「なんでって、コーチにお願いされてたじゃない」

「そうですね。貴方この一週間、左手だつてろくに使っていないのですから」

言い捨てながら薫子は心から滲み出る怒りを咬み殺す。全力はおろか利き腕すら使

うに値しないとされているようで、この一週間苛立ちは募るばかりだった。

薫子は知っている、綾乃の本当の強さを。

去年の全日本ジュニア、益子泪と繰り広げた死闘を。

あれをもう一度見たくて、あの状態に入った綾乃を倒したくて、薫子は数々の選択肢を捨てて北小町に入学したのだ。

半年経った今、自身と綾乃との間に聳え立つ壁を明確にしておきたい。

「そうだねー。たまには全力出さないと鈍っちゃうから左手使うのはいいんだけど……」

「何か不安があるの?」

キュッキュツと靴が擦れる音とシャトルを打ち抜く音が木霊するのが耳に届く中、り子の疑問に綾乃は無垢な笑みを口元に刻む。

邪気の無い、それでいて無責任な怖気を孕んだ花が咲いたような笑みを。

「相手がバドミントン辞めても知らないよ?」

仄昏い煌めきが瞳に映る。

どこか螺子の外れた、綾乃にとっては日常的な歪なそれ。

数えてはいない。辞めたと知ったのも姿を見なくなつてしばらく後のこと。続く
するそれらにやっつと気付いた。

自分が左手を使うところなるんだと。

退屈を凌ごうと遊びを組み込むと更に悪化するのも中学時代で学んだ。

学んでも、綾乃にやめるといふ選択肢は無かった。つまらないから、退屈だから。

自分は母が作った人形だったから。

初めて見たのだろう。親友の隠れた一面を垣間見たエレナとのり子は言葉を失う。

薫子だけは綾乃の狂気を含めて望外の機会と喜びを表情に滲ませ、逸る気持ちを誤魔化すようにラケットバッグを背負い直した。

そんな雑談を交わしたらいつの間にか体育館までやって来ていたらしい。

暗い廊下を抜け、明転する視界。

飛び込んで来たのは金色で。

「——お姉ちゃああああああんっ!!?」

「わっぱつとおーつつつと??」

何某かがとんでもない勢いで綾乃に抱き付いてきた。

それを理解するより先に綾乃は超反応で相手を抱き留め……るのは重さに押し潰されそうで無理だったため、映画のワンシーンのように相手を二回転ほど抱き回して勢い

を殺す。驚異の状況判断力とボディバランスが成し遂げた偉業に、咄嗟に退避していたエレナ達が感嘆していた。

綾乃の視界が一瞬で黒く染まり、顔が柔らかな弾力に富んだ二つの果実に包まれる。

あつ、私今おっぱいに挟まれてる……と悟った綾乃は、未だ此方を抱き締める下手人へとそのままの状態で声を掛けた。

「なんでこんなところにいるの、コニーちゃん？」

「お姉ちゃんに会いにきたんだよ！」

何故この娘はこんなに懐いたのだろうか？

湧き上がる疑問を傍に、拘束を緩めてもらった綾乃はやつと金色の正体——自称妹であるコニー・クリステンセンと視線を合わせた。

「久しぶりには早いけど、一週間振りだね、コニーちゃん」

「うん、お姉ちゃんに会えて嬉しいよ！」

遠足ではしゃぐ幼児のような眩い笑顔のコニーに、もうお姉ちゃん呼びを訂正するのすら憚れた綾乃は改めてキョロキョロと周りを見回した。

圧倒的女子高生率。

なんとなく把握した。

「フレ女が来てるんだね」

「——正解よ。一週間振りね、綾乃」

コニーの背後から親しみが込められた挨拶が聞こえ、綾乃は口元を綻ばせる。

ひよいと覗けば、肩辺りで切り揃えられた黒髪を片方の耳に掛けた少女——志波姫唯華が微笑みをたたえていた。

「最速の再会だね、唯華ちゃん」

「ええ、そうね。元々はそんな予定なかったんだけど、この娘があり得ないくらい駄々を捏ねてね……」

珍しく疲れた様子を窺わせる唯華。どうやら末っ子のワガママ具合には流石の唯華も呆れているようだ。

現在進行形でコニーに抱き締められている綾乃も、ふと同じ苦勞を背負い込む未来を想像してしまう。

——やだこの娘メンドくさい。

『……………はあああ……………』

ここまで唯華とシンクロするのは初めてだった。

「さてと。私はフレゼリシア女子バドミントン部主将として挨拶に回らないといけないから、また後でね」

「はーい。主将は大変だね〜」

「それなりにはね。……コニー、私がいなくなったからって勝手な行動取らないですよ？」
「うん！ 行つてらつしやい、唯華！」

「……………心配だわ……………」

嬉々として唯華を送り出すコニーの目のなんと輝かしいことか。

一切の信頼が無い問題児に唯華は眼から光を消えていくのを自覚しつつ、後からやつて来た北小町バドミントン部顧問である太郎丸美也子たろうまるみやくこを見付けて歩き去る。

「お姉ちゃん、試合しよ試合！ 唯華もどつか行つたから今の内だよ！」

コニーは唯華の不安を見事に裏切らなかつた。

「私が唯華ちゃんに怒られるからイヤだよ。それよりも……………」

綾乃は首だけで背後へ振り返り、キョトンと固まる友人達へ目を眇めた。

「コニーちゃん、いい加減に放して。あと、私の友達に自己紹介！」

「ええー！ そんなことより試合しあひあひ！」

「……………お姉ちゃんのお願いは聞けない？」

「フレゼリシア女子バドミントン部一年のコニー・クリステンセンです！」

即座に身を翻し、調教された兵隊の如き直立不動で挨拶を述べるコニー。お姉ちゃん大好きな妹は、お願いと言えば大抵は従ってくれるらしい。

成る程、コニーはこう扱えば良いのかと綾乃は学ぶ。超突貫でコニーに外堀を埋めら

れ、自身も全力で墓穴を掘っている気がしないでもないが。

「コニーの挨拶を受けてようやくやくエレナ達が動き出した。」

「ちよつと綾乃！ アンタに妹がいたなんて初耳よ！」

「しかもどう見ても日本人じゃない……」

「……お二人共冷静になつて。同級生の時点で血は繋がつてな……異母姉妹という可能性はありますわね」

全員が盛大に混乱していた。

特に薫子、テメエは駄目だ。一人冷静を気取りつつ、綾乃の父親を下衆扱い一歩手前とは何事か。

ここで面倒くさがるとロクな目に合わないと感じ、綾乃は大きな溜め息を吐いて渋々説明に移る。

「コニーちゃんとは血は繋がつてないよ。会つたのも一週間前が初めてだし」

「じゃあなんでお姉ちゃんって呼ばれてるの？」

「お母さんが海外で世話してたんだつて。失踪してからは二人で暮らしてたらしいよ？」

あつげらかんと溢れたその台詞に三人は少なくない戦慄を覚える。

仮にも母親が長期間留守にしていたというのに、綾乃の声音に含まれる感情は喜怒哀

楽の何もかもが存在していない。今朝見たニュースの話題を友達との会話に使うような、ただ単に事実を述べただけの。

もはや淡白の一言では言い表せない違和感がこびり付いており、人としての大事な何かが欠けてしまっているのだと思わずにはいられない。

当の本人は全く気にした様子は無く、原因の一端を担うであろうコニーにも罪悪感などが砂粒ほども見当たらないのが奇妙なくらいだ。

むしろコニーは出会って一週間とは思えない懐き具合。

この姉してこの妹あり。

エレナ達はとて失礼な結論に落ち着いた。

色々と脱線していたが、突如として薫子がハツと表情を変えた。

「待つてください。貴方、コニー・クリステンセンとおっしゃいました？」

「ええそうよ。デンマークから来たの」

「羽咲さん、本物ですか？」

「コニーちゃんがプロかって意味なら本物らしいよ」

「えっ？ この人そんな凄い人なんですか？」

断片からでも感じ取れる異様な雰囲気エレナが首を傾げ、薫子は自身の記憶の整理を含め声に出して説明する。

「コニー・クリステンセン。デンマークユース代表。数々のタイトルを総ナメにした天才バドミントンプレイヤーと言われてますわ」

「へえ、よく分からないけど凄い選手なんですね」

「そうよ、私はプロなの」

えっへん、と胸を張るコニー。仕草が子供っぽいなどと各々が思ったが、言えば面倒そうなので揃って口をつぐむ。

(……………?)

ふと、綾乃はいつの間にか静まり返った体育館の随所を一瞥し続ける。

(見られてる。目当てはコニーちゃんかな?)

綾乃は詳しくなかったが、コニーはバドミントン業界においては超有名人。実力もさる事ながら、その類稀なる美貌もあつて蝶よ花よと褒めそやされ、今後のバドミントン業界を率いる先導者としても期待されているのだ。

注目されない訳がない。フレ女の部員はともかく、その他のバドミントン選手がこぞつて見ているのだろうと綾乃は納得していた。

それは正解で、同時に不正解であった。

「……………あれって、まさか羽咲綾乃?」

「去年の全日本ジュニアで中学生にして三位になった神童……………」

「なんで羽咲さんがコニー・クリステンセンと？」

「お姉ちゃんって言ってたけど……」

コニーは確かに有名だ。雑誌にも取り上げられたこともあり、世界規模と言ってもいい。

だが同世代においては神童——羽咲綾乃の名前の方が、遥かな畏怖をもつて知られていた。

知らぬは当人ばかり。

神童と最強。バドミントンに携わる日本の少年少女で綾乃と泪の試合を見ていない者にはわかりに等しいのだ。

周囲のざわめきを余所に、綾乃は再び我が儘を発散するコニーを押さえつけ、慌ててやって来たフレ女の副主将である美里さきに投げ渡す。

「お姉ちゃああああああんっ!!?」

「あははー、ウチの子がごめんねー！ あつちが更衣室だから、みんな着替えてくるといいよー」

「そうですね。行きましようか、羽咲さん」

「そだねー」

制服であった北小町の四人は言われるがままに更衣室へと向かいその場を去る。

綾乃の姿が見えなくなった直後に大きくなる喧騒。交わされる言の葉に違いはあれど、内容に顕著な差は無く。

——まさかこんなところで羽咲綾乃とコニー・クリステンセンに会えるとは。

(まずいわね、これは……)

体育館に漂う空気を敏感に察した唯華は面倒ごとの気配に溜め息を押し殺す。

これは自分の力だけでは収められない。主将としては後輩が仕出かした責任を取るべきなのだろうが、綾乃まで混ぜてしまうともう手の施しようがなかった。

ここまで盛り上がってしまったのだ。絶対に誰かが囃し立てるに決まっている。

生贄が必要だ。

(……仕方ない)

あの劇薬二人は二束三文で売り払おう。

綾乃、完全にとぼちりである。

そして唯華の計画上、もう二人捧げる予定である。

「立花さん、でしたっけ？」

「ああ。どうした、志波姫？」

北小町のコーチでありバドミントン部の実質的な責任者の立花に目を付けた唯華は、人の悪い笑みを浮かべた。

「一つ、ご提案がありました」

「それで、なんでこんなことになったの？」

「私に聞かれても困りますわ……」

「ダブルス苦手なんだけどな」

「なんとなくそうだとは思っていましたよ」

靴紐を結び終えた二人はコートへと脚を踏み入れる。

どうしてこうなったと表情で語る両者は視線を合わさず、ただ淡々と言葉を交わす。

「足引つ張らないでね、薰子ちゃん」

「それはこちらの台詞ですわ、羽咲さん」

互いに憎まれ口だが、二人に浮かぶのは不敵な笑み。

北小町バドミントン部の問題児二人が手を組んだ。